
世界少女

山城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界少女

【Nコード】

N7919V

【作者名】

山城

【あらすじ】

孤児院で暮らすアンナは、彼女をよく知っているとうれしそうに話す、見知らぬ少女と出会った。帝国の侵攻で小さな村は炎にまかれ、少女は敵に捕まってしまう。盗賊の青年、素顔を隠したアサシンと共にアンナは旅をする。幼い少女が背負った運命を見守り、この世界の真実に触れるために。

1回目 見知らぬ相手

この世界をつくったのは創造の神マフィアである。

マフィアの力で空と海と大地が生まれ、大地の上には深く険しい森と、美しく澄んだ湖ができた。そうして、自分の子である二人の神を地上へ呼ぶと、それぞれが望むものをつくりなさいと命じた。

知恵の神であるアガスティアは『人間』をつくり、力の神であるジャガドは『獣』をつくり出した。

ところが、仲の悪い二人は互いに相手がつくったものを延々と貶してばかりで、6日間も言い争っている。

マフィアは悲しみに暮れて、7日目には二人を残したまま地上から姿を消した。

（ギヤマンが記した書物より抜粋）

「きっと大丈夫です、神様が不幸ばかりをお与えになるはずありません。それでも、幸せがここへ届いた時に、体を壊していたらとっても残念ですよ」

優しく老婆へ語っている少女の手には、小さなパンとコップに入ったミルクが揃っていた。どちらも教会から持ってきたもので、貧しい人や病気の人には無償で分け与えるように定められている。

「でもねえアンナ、私だけ生きてたつてしょうがないんだよ。これから先、喜べることもなあって一つもありやしないよ。アンタだって、明日もここに立っているかどうかさえ分からないんだ」

「なに言ってるんですか、私はちゃんと届けにきます。ほら、道だつてまた綺麗になってきたんですよ。あそこでスキップだってできるし、荷車も揺れないから大きな荷物だって運んでこられます」

少女は体をずらして外の景色を老婆に見せる。

古めかしい木の椅子がギツと音を鳴らし、老婆は小さな背中をゆっくりと動かす。顔を

横にして、窓の向こう側をそっと覗いてみる。

古い木の杵から捉えることができたのは、壊れた石垣と丘の下まで伸びている荒れ道だ
け。村から離れて孤独に暮らす年寄りのために、わざわざ骨を折ってくれる者など一人しか知らない。昨日より少しだけマシになっているのは、彼女がここまでする道すがら精一杯に頑張ってくれたのだろう。

ちらりと目をやれば、爪の間には土が詰まっていた。

「ああ」と小さな声が漏れ、老婆はまた肩を落とす。孫に近いほどの彼女が、自分のために苦勞するのが分かり、死んだ息子から責められるような気持ちがある。

丸めた背中にふわりと手がそえられ、優しく慰めるようにさすってくれた。

「今日はねえ、ホントのところはお腹がすいてたみたいなんだよ。ありがとう、パンもミルクも頂いておくわ」

「それじゃあ、このテーブルに置いときますね。寒くなってきたし、火がいるなら言うてください」

老婆は首を横にふり、感謝をこめて少女の手をポンポンと叩く。指先は冷えきっていた

のだけど、触れさえば温かい。息子を先に連れていった神様に感謝などはしたくないが、
小さな不思議をこの世界につくったことは褒めてもよかった。

女の手にはやや重い荷車を引いて、アンナは老婆の家を後にする。

チグリスの村では冬が早く、うっかり寝過ごしたら春には土の中だと揶揄される。こうして丘の上から見渡していると、どの家も煙突から煙をなびかせており、なんだかホッとしてきて自然に笑みが浮かぶ。

アンナはこの村が大好きだった。ここから見下ろす風景は、とおきの宝物と比べても、どちらの方が綺麗だろうかと思ってしまうくらいステキに感じる。

西の風車小屋と東の教会の間に、押し込めるだけの家を置いたこぢんまりとした村。

外の世界を知らないアンナにとって、この閉じた世界は手のひらにピッタリと収まる石ころみたいだ。ほどよい大きさのものをすでに持っていれば、別のはこれといって欲しくもならない。

（きっと神様もこの村を大切に思ってくれてるはずよ。だから大丈夫、戦争なんて絶対に起こらないわ）

ガラガラと音を立てる荷車はもう空っぽだから、アンナは少し急

いで坂を下りていく。

薄い布服は冷たい風を肌につけ、人よりも大きな胸がその下で軽快に弾む。腰までかかる褐色の髪は馬の尻尾みたいに左右に乱れる。くるぶしの上で擦り切れているスカートは、孤児院の子供たちがつけた鼻水やなんやらで汚れていた。

山の向こうに消えかかった夕日は、神の慈悲が魔物に奪われるようにで心細くなる。

16にもなって夜が怖いだなんて言えない。だから、彼女はこのことを誰にも内緒にしていた。それでも、暗くなったら皆と一緒にいたくなる。アンナは今晚のスープに入っていたら喜ぶものを想像しながら、できるだけ速く走った。

教会へ戻る時は市場の中を通っていく。店からこぼれる明かりはとても頼もししいし、あちこちから聞こえてくる話し声が、怖いものを追い払ってくれそうだから。

「お帰りアンナ。婆さんの具合はよかったか？」

「アンナ、こいつを持ってきな！」

「アンねえちゃん、ちょっと聞いてよ。カールがまた殴ったんだぜ」

家族のように見知った人たちと話しているうちに、胸の動悸はおさまっていた。もう辺

りは夜の覆いがかかり、虫のようにちっぽけな人々は逃げ出すことができない。だからこそ、余計に声を大きくして皆が笑っている。アンナはその中にいるだけで安心だった。

道幅が狭くなり、人通りもだんだんと減っていく。ようやく教会の屋根が遠くに見えたことに気を取られてしまったアンナは、足下の小さな物体を見過ごしていた。

「うあっ！ やっ！！」

おもいきり顔面から倒れ込み、ハデな音を立てて荷車が裏返る。さつき手みやげに渡されたチグの実がころころと転がる。

顔を押さえて振り返ったアンナは、自分が小さな子供にぶつかったのだと気がつき、慌てて立ち上がる。包みを解くみたいにボロ布から女の子がこぼれていた。

「あの、大丈夫？ ごめんなさい、痛かったでしょ」

声をかけられた小さな女の子はゆっくりと目を開ける。そして、澄んだ青空のような瞳にアンナを映し――

「……アンナ………本当に………本当なの？」

震える唇をきゅっと結んで、やっぱりそれをこらえきれずに、今

度は大きく息を含んでから声を上げる。

「うっ……ヒっう……アンナ、アンナ、アンナ！」

いっばいに溜めた涙を鼻で吸うようにしゃくり上げながら、素足で土を蹴って飛びついてきた。

「わっ、ちょっ！」

「うっぐ、ヒっ、ふうううう」

汚れたスカートに顔をうずめ、こらえていた大きな塊が喉に引っかかりでもしたみたい
に、何度も苦しそうに嗚咽を漏らす。

布にしみ込んでくる温かさは、彼女がよく経験してきたものだった。それだから、どう
すればいいかなんて考えなくても分かる。

まるで鳥の巣みたいにはつれた髪を抱えてやり、少女が安心するまで待っている。雨が
硬い地面をやわらかくするように、涙が胸に溜まったものを崩して運んでゆく。

「アン…ナ……どこに……いたっの……ずっと……ずっと探してた……のっ…見つけ——」

大切な誰かと自分を間違えているこの幼い少女に、どんな言葉を

かければいいのか悩みながら、アンナもまた不思議なうれしさを感じていた。種をまいて次の日には芽を出す奇跡を見たような、ひな鳥がはじめて飛び立つ瞬間を覗いたような、それは一生に一度でも出会えるかどうかの喜びだった。

まだ両脚にしがみついている少女を見下ろしながら、洗ってやれば麦の穂のように輝くに違いない金髪を優しく撫でる。

やっとのことで落ち着いた少女を道の端に座らせ、アンナもその隣に腰を下ろす。見上げる大きな瞳は睫毛が長くて、顔立ちはため息がでるほど美しい。

「ねえ、名前を訊いていいかしら。私のことを知ってるみたいだけど……」

アンナの質問に少女はしばし固まっていたが、急にお腹を押さえて震えだす。

「あの……痛いのか？ どこか打ってみたい？」

「あっはははッ！ もう、アンってやっぱりおもしろいわ！ ねえ、どうしてそんなにたくさんしてくれるの？」

少女の質問の意味が分からず、こんどはアンナの方が固まってしまふ。少女は足をパタパタとふりながら、そこに何かが映っているかのように真っ暗な空

を見上げる。

「私が泣いてたらすぐに楽しいことを考えてくれるし、虫の名前を
書庫で一緒に探してく
れるし、夜にいっぱい本を読んでくれるし、どうしてかなって思っ
てたの」

少女はニッと笑いながらアンナの顔を見返してきた。涙を輝かせ
るその瞳は、先程より
もいっそう大きくなってきらめいている。

「キスメニア王国の王女であるロリ・アン・フォードストックが命
じます、さあ答えなさい！」

今までずっとそうしてきたというふうな態度で、少女は朗々とア
ンナに向かってこう述
べるのだった。

2回目 チグの実

夢を口にする子供はたくさんいる。

騎士になりたがる子や、商人になりたがる子、建築家になって孤児院をお城にするのだ

と語ってくれた優しい子、アンナは皆に「あなたならきっと大丈夫よ」と答えた。それが

難しいことだって、誰もが本当は知っている。

「こらっ！ 王女の命令よ、答えないと重い罰があるわよっ！」

どうやら真剣に尋ねているらしい相手の眼を見て、アンナは返事に詰まった。

「はい……えっと……どんな質問だったかな？」

「アンナ！ 質問に質問で返すのは無礼よ！ お父様が前にそう言ったわ」

あまりに正当な言い分に、アンナは顔を赤くして謝るしかない。たんにはすっぱなわけではないのだと直感し、お尻の辺りがソワソワしてくる。まるでメサイア先生の授業で当てられた時のようだった。

草をかぶった石の上に立った少女は、突然「えいっ」と抱きついてくる。

「きゃあ！」

まったく遠慮のない勢いに押されて、そのまま道に倒れ込んでしまふ。少女は悪びれる様子もなく笑って見下ろす。

「アンは特別だから、これで許してあげる。私はアンが優しくしてくれたことがすごくうれしかった。だから、理由がないなら別にいいの。だって、アンが私を好きってことは同じでしょ？」

彼女の人違いを解いておかないと、きっと後から困った事態になるだろう。でも、涙の跡の方が、今はずっと重大なことに思えるのだ。

彼女は苦しみを耐えてきた。さっきまで泣きじゃくっていたのを見れば、それがどれだけのものだったか想像できる。この場で別人だと伝えるなんて、アンナにはどうしてもできなかった。

「ええ、そうよ。あなたが大切だからこうしたいの」

左の手を少女のやわらかな髪にそえて、自分の体へと引き寄せる。

胸に顔をうずめられるのは恥ずかしかったけど、彼女が言うとおりに今だけは特別だからと、右の手で華奢な体をぎゅっと抱きしめる。折れそうなくらい細い背中が脱力し、少女

はようやく辿り着けた安心にくるまって鼻をすする。二つの速い心拍がだんだん緩やかに
なり、目を閉じて眠りに入る様子を見せた途端――

グっぐううう、ぐきゅるるっ！

唐突に少女のお腹が鳴った。ギクツとするほど大きな音で、さながら不機嫌になった時のビーバーラットのようだ。

なんとなくだが、伝わってくる体温が変わったような気がする。少女は身じろぎもしないで、顔を隠している。ずいぶん軽いと思っていたけれど、その理由が分かった。

「空腹は清貧の誉れだと言いますよ。それにほら、ここにいいものがあります」

少女を上に乗せたまま、アンナはぐいっと左手を脇へ伸ばす。ちようど体の横に転がっていたチグの実を掴んで、相手の顔へと近づける。

微かな匂いにつられた少女がこちらを向く。空腹のせいなのか怒っているみたいだ。

「……それ、美味しいの？」

目を輝かせるに違いないと想像していたアンナは、軽くショックを受ける。確かにチグの実
は黒ずんだ皮をしているが、剥いてみれば明るいオレンジの果

肉が詰まっている。

「もちろんです。この村の人たちが傲慢にするほど、美味しいものですから」

「なら食べてもいいわ。もし美味しくなかった時はくすぐりの刑にするけど」

大きな瞳がいたずらっぽく細められる。まるでアンナがくすぐりに弱いことを見抜いているかのよう。

パツと体を退けると、道の端にならべられた石に腰かけて「早く食べさせなさい」と催促してくる。アンナも体を起こすと、その隣に座った。

厚い皮を苦勞して剥くと、中の果汁が指をつたって落ちる。瑞々しい果肉は、夜でも輝くほどに綺麗だ。訝しがっていた少女も、ぐいぐいと腕を引っ張ってくる。

「はい、どうぞ。まだ少しだけすっぱいかもしれません」

指をそろえた手のひらに置いてやったら、自分の顔を叩くような勢いで口に運んだ。

「んっ……んっ……んんう」

まだ飲み込んでもいないのに、空いた手のひらを伸ばしてくる。

騒がしい子供を注意する時、メサイア先生は「沈黙は美德ですよ」と厳かな口調で言っていたけれど、確かにそうだとアンナは初めて納得した。

チグの实の美味しさを少なからず誇りにしていたアンナは、無心で食べている少女の姿がともうれしく、なんだかもう一度この手で抱きしめたいくなる。

大人のこぶしほどもある果実をすべて食べ終わった少女は、何も言わずにアンナに寄りかかってくる。その顔はとても満足そうで、アンナは自分が夜の闇に包まれているのも忘れて見惚れた。

「アンナ……これをたくさん売ったら、あなた大金持ちになるわ」
感嘆の言葉を聞いて、アンナは思わず吹き出してしまう。そこまで褒めてもらえるなんて、さすがに予想の範囲外だった。

「むう、だってホントにそうなんだから。ウソは言わないのに」

「ふふっ、ありがとう。——この実はいろいろなところになるそうです、だけどこの村の近くで採れるものが、どれよりいい味がするんですよ」

「だったらいいじゃない。他のところにあるのはみんな、ここにできたモノに敵わないってことでしょ」

アンナは首をふり、おかしそうに笑う。

「違うんです、そうじゃなくって皆が自分のところが一番だと思ってるんですよ。つまりは、ちゃんと背比べをしてるわけではなくって、初めから台の上に立って周りを見てるんです」

少女はまだ納得できないといった表情だ。その頭を優しく撫でながら、アンナはふと歸りが遅くなっていることを心配する。

教会に荷車を返した後、そこから北にある孤児院まではもう少し歩かないといけない。

アンナは立ち上がり、荷車を手元に寄せて少女を見る。ほっそりした素足を擦り合わせている姿は、とても寒そうだった。

「さあ、そろそろ帰りましょう。ロリさんはここへ乗ってください」

荷車の床を手早くはたいてからそう言った。

もう彼女にほとんど体力は残っていないだろう。外から見てもはつきりとそう感じるくらい、少女はやつれていた。帰ったら身体を洗って、ベッドに寝かせてやらないと。

「……いい、歩く」

つぶやくような返事があった。でも、どう見たってそれは虚勢だ。

「大丈夫です、私これでも体力はあるんですよ。あなたが一人乗っても走れますから」

少女は首を横にふり、座ったまま動こうとしない。なぜかまた怒った顔をしている。

「えっと……荷車が嫌なんですか？ お尻が痛くなるのは我慢してもらえないですけど、帰ったら石鹸も使って——」

「アンナ！」

大きな声で遮られて、見上げる視線と鉢合わせする。そして気がついた。彼女は怒っているのではなく、悲しんでいるのだと。

「アンは私の友達でしょ？ 私は歩けるんだから、アンと一緒に歩くわ」

相手は小さな子供だから、自分の方が苦労するのは当然だと考えていた。それは、大きな石の上に小さな石を置くようなものだったかもしれない。小さな石はいつでも大きな石の上だと、そうやって決められることを悲しんではいなかっただろうか。

アンナは少しばかり、自分にそっくりな『アンナ』を羨ましく思った。

「じゃあ、足を出してください」

少女の前に屈んでそう言ったら、相手はサッと両脚を引っ込めてしまふ。こんどは怯えるような表情に変わる。

「……叩くの？」

「どうして、私がロリさんの足を叩くんですか？」

そう訊いてから、質問に質問で返したことに気づいて、すぐに「叩いたりなんかしませんよ」と言いたしておく。

少女は少しだけこちらの顔色を窺いながら、その理由を話してくれた。

「フローラはね、私が勝手に遠くまで遊びにいったら、後でお仕置きをするの。ムチでこのところを叩くんだから」

スカートの裾をまくり、足首の上をさすってみせる。小さな足の指には泥がこびりついており、すり傷がいくつもあった。

アンナはポケットからハンカチを取り出すと、冷たい足裏をそれで包んでやる。

一枚しかないレースのついた白いハンカチ、それは子供たちが街

へ出かけた時、こっそり貯めていたお金でアンナにプレゼントしてくれたものだった。

上に伸ばした二つの端を結びながら、気持ちの底に抵抗を感じてしまう自分を、胸の内

で叱責する。思い出と少女の苦痛を比べてみるなんて間違いだと。

左足をハンカチで包んだら、右足には腰ひもを解いて巻いておく。これで痛みも少しはやわらぐだろう。教会に着いたら靴を貸してもらえばいい。

少女が道でピョンと跳ねるのを目にしたアンナは、自分の頭をこぶしでそつと叩いた。

「それじゃあ帰りましょう。急がないと夕食の時間を過ぎるかもしれません」

少女はボロ布を外套のように体へ巻きつけて歩きだし、アンナはその横で荷車を引いてならんだ。

大切なものの順位が入れ替わっても、それが特別であることは少しも変わらない。春には種が他のなによりも輝きを増し、夏には水のせせらぎが宝石よりも価値を持つ。秋の実りは吟遊詩人の歌声よりも喜ばれ、冬には暖炉の火がどんな衣服よりもありがたい。

白いハンカチがどんなに汚れてしまっても、これまでと同じく彼女の大切な宝物であり

続けるだろう。

3回目 教会の牧師

冷たい夜風は、二人がそこにいるのも気にせずビュウビュウと吹きつける。

少女は大きなくしゃみをした後、布の端で鼻をこする。さっきまではお腹を押さえるように歩いていたのだが、今はアンナの前で飛んだり跳ねたりと忙しい。

ボロ布がまかれると、その下には雨と土で汚れたらしい茶色い布服がひらりと覗き、どれだけ辛い旅をしてきたのかを如実に表している。

「あの……そんなふうにしてたら寒いんじゃないですか？」

気になってしかたがないアンナはそう尋ねてみた。少女はくるりと振り向いて、目をパチパチさせる。

「寒いわ、アンも寒いでしょ？」

「ええ、それはそうですけど」

「こうやって風を散らしてるのよ。だってアンのほうが大きいんだから、私より冷たいはずでしょ」

アンナは少女の気遣いに驚きながら、その子供っぽい発想におか

しくなる。風を手で分
けようとしていたなんて。

「ロリさんは風とケンカでもしてるのかと思ってました」

「失礼ね、風は見えないんだから叩きようがないじゃない。でも、
見えたら『遠慮しなさ

いっ!』——って怒鳴りつけるわ」

「ふふっ、そんなこと言ったら余計に怒らせるんじゃないですか？」

「平気よ、だって私がキスメニアの王女だって教えればいいんだか
ら。きつと驚いて、言

うとおりにすると思うの」

笑顔でそんなふうに話す少女を、アンナは複雑な思いで見ていた。

(……空想病……なのかもしれない)

孤児院で2つ年下のセトが、よく周りの子にそう言っていたのを
思い浮かべる。

小さな子たちはたくさんの作り話をアンナにするけれど、それは
皆が心の中でそうあっ

てほしいと願っていることだった。精霊の声を聞いたことがある子、
本当なら貴族の家で

暮らしているはずの子、両親はどこか遠くに住んでいるのだと言
い続ける子、ウソでもい

いから認めてほしいとつぶらな瞳で訴える。

セトは彼らを小馬鹿にするように「そんなことばかり空想してたら、しまいには空想病になって頭から離れなくなるんだぜ」と口にする。

もしかするとこの子は、自分で作った話を本当だと信じてしまったのだろうか。自分ではウソだと思っていないから、こんなにも明朗に話すのかもしれない。

その考えは、アンナにとって夜風よりも冷たいものだった。教会がすぐそこまで近づいていなければ、笑顔を返すのも難しかっただろう。

東のはずれにある教会は、普通の家よりも横に長くなっている。礼拝堂をだんだんと拡張していった結果だ。

木材とレンガを使って建てられた教会は、立派な外観をしていた。たくさん村人が協力して、この祈りの家を大きくしていったのだ。屋根の風返しには見事なレリーフが彫られており、そこには神聖が込められている。

アンナがずっと小さかった頃には、教会でお祈りをする人なんてほとんどいなかったらしい。新しい牧師がこの村へ来て、人々に信仰と感謝を広めていった。

両開きの大きな扉の前に、さらに大きな人影が立っている。縦にも横にもどっしりとし

ている巨体は、闇の中に姿を現したウッド・ベアーと間違えそうなほどの迫力だ。

「お帰りなさいアンナ、それから小さなお客人も」

よく通る低い声をこちらに投げかけた男は、本人が『温かな笑顔』と信じている笑みを顔に浮かべて、少女の前に膝をつく。

「……あなた、人間よね？」

少女は開口一番にそう訊いた。男は笑顔がその答えとばかりに笑っているのだが、残念なことにはそれは逆効果だろうとアンナは心配する。

「帰りが遅くなりました。ブルーウェル牧師を待たせてしまったなんて」

「いやいや、ちょっとコイツの木くずをはらいに出てきたんです」

牧師が右手に持っていた木の板を持ち上げると、前に立つ少女が僅かに背中を引いた。

「さあ、まずは中に入りなさい、ここでは寒いでしょう。階段が三つあるから気をつけるように」

そう言って、大きな手を伸ばすと扉を開けてくれた。

少女は寒さがこたえていたらしく、すぐに中へと駆けていった。

荷車をかたずけにいく
牧師に代わって、アンナが扉を閉める。

礼拝堂はいつでも塵一つないように掃除されていて、部屋の両端には木の椅子がきちんと積んである。

外の冷たい空気から守られると、身体は一気に冷えを感じてガタガタと震えだす。松明のすぐそばにいる少女の顔は、色がなくなったように白い。

アンナは隣に腰をかがめて、腕をまわすと震える身体をくっつけ合った。

「さっきの人、ここに住んでる人？」

肌のぬくもりに目を細くした少女が、そっと囁いてくる。どうやらまだ人間かどうか疑わしいようだ。

「ええ、そうです。ここはブルーウェル牧師の教会なんですよ」

「あの人が牧師なの？ てっきり見張り番かと思ったわ。だって、あんなに大きくて私の体よりも太い腕をしてるんだもの」

ブルーウェル牧師の風体は、この子からすれば動く岩のようなものだろう。

見張り番と間違われるのもしかたがなく、それどころか実際に剣

の腕も立つ人なのだ。

村の剣技会であっさり優勝した後に、自警団からの申し出を受けて、若者たちにその技術を教えている。

「あまり怖がらないでくださいね」

「まさか、ちょっと首が疲れる人だなんて思うだけよ」

少女は澄ました顔で言うと、さらりと流してしまう。ずいぶん達者な子だと、アンナは感心させられてしまった。

前方にある祭壇から右横に進んだところに、小さなドアがあった。そこから牧師が顔を見せる。

「アンナ、彼女を奥へ通してあげてください。飲み物を温めますから、あなたも一緒にどうぞ」

「はいっ、感謝します」

二人でドアまでいく途中、少女がふと足を止める。

緻密な装飾がほどこされた祭壇の真後ろに、それより遙かに美しいモザイクが飾られている。おそらくそれが目に留まったのだろう。

毎日ここへ来ているアンナでさえ、近寄ってみれば、いまだに慈

愛の光を浴びたように
感じさせられるほど、精巧に作られた表情。女性には長い髪を地面まで垂らし、静謐な樹木
のごとく両手を開いている。

女神アガスティアの姿を形にとったモザイクがそこにあった。

「…………悪い…………神様……………」

「えっ？」

小さな声が聞こえたような気がしたのだけど、視線を向けた時には顔を伏せていた。

少女はじつと左胸の辺りを手で押さえている。まるで女神にそこを見られたくないとでもいったふうな様子だ。

「どうかしたんですか？」

「…………ううん、なんでもない。ちょっと、お腹がすいたところを間違えたみたい……………」

声にも急に元気がなくなっている。アンナが「行きましょう」と手を伸ばしたら、強い
力でぎゅっと掴んできた。

隣にある小さな食事場所には暖炉の火があり、少女はびっくりするくらい歓声を上げながら、アンナを引っ張っていく。

「うあああああ！！！　見て！　すごいっ！　ほらっ、アンナもこっちへ来て！」

興奮したために鼻水が垂れてきている。狭い部屋の中で走りだし
そうなほど、勢いよく
炎のそばへと向かう。

確かに暖炉のぬくもりは心地よいものだが、喜び方が普通じゃなかった。アンナはとっさに繋いでいた手に力を入れる。そんな緊張は幼い子を世話する時に持つものであり、この少女には不釣り合いだった。

「ロリさん！　あのっ、落ち着いて！」

火の手前で足止めされた少女は、こんどは放心したようになり、燃えている薪を静かに眺め続ける。その変化の唐突さに、ブルーウェル牧師も驚いて目を見張った。

揺れる陰影のせいなのか、照らされた彼女の横顔は、この世に存在してはならない亡者のように映る。

喜びや悲しみや怒りの感情を使い果たし、光に作られた影のように、ただそこへ置き去りにされてしまった存在。

この少女がどこから来たのか誰も知らない。アンナと偶然にも出

会わなければ、本当に
光の移ろいと共に消えてしまったかもしれない。

「……誰も……私と話してくれなかった……私がどこにもいなくなつたみたい……」

微かに震える声で少女がつぶやく。そして、どこか救いを求めるようにアンナのほうを
振り返った。涙のすじを光らせながら、弱々しく眉根を寄せる。

（ああ……私はなんて馬鹿なんだろう）

アンナは後ろから少女を抱きしめた。頬をすり合わせ、悲しみを自分にも分けてもらおうと目を閉じる。

見えていた世界はなくなり、小さく揺れる闇だけがそこにある。

眠れないままじっと天井を眺めている夜でさえ、あんなにも長く
終わりが無いと思える
のに、この子は獣がうろつく村の外から、何度も危険な夜を越えて
ここまでやって来たと
違いないのだ。

こんなにも小さな身体で、どれだけの苦勞を背負ってきたのだろうか。

薄い服の下からは、それでも力強く拍動している命をしっかりと
感じる。アンナは心か
らそれを伝えたくて口を開いた。

「あなたはここにいますよ、ロリ。ちゃんと私を見つけてくれました」

ふたつの手がアンナの両腕にしがみつく。アンナは彼女が泣き止むまで、ずっとそうしていた。

「フーツ、フーツ、すっごくいい匂い」

テーブルに置かれた木のコップに口をつけて、ロリは息を吹いている。

ブルーウエル牧師が温かい飲み物を出してくれて、三人は四角いテーブルを挟み、それぞれのコップで指先をぬくめていた。

ロリは泥だらけだった服を着替えて、最低限の清潔さを取り戻している。ブルーウエル牧師が彼女の小さな身体に合う服を与えてくれた。やせた体は空気をはらんだ袋のように軽くて、持ち上げたらどこかへ飛んで行ってしまうのではないかと思えた。

「これは『赤鳥の好きなスープ』と言うんです」

大柄な牧師は、背中を丸めて話している。でも、その様子はやっぱりウッド・ベアーに似ているなど、アンナは胸の中でつぶやいた。

「それって、ちょっと嫌な名前ね」

ロリの返事を聞いた牧師は、心外そうに目をくるりと回す。

「赤鳥はおとなしくていい家畜ですよ、だけど、すぐく病気に弱いんです。それで人が飲む薬草をあげてみたら、たちまち滋養がついて肉も美味しくなったそうです」

「やっぱり人間じゃなかったのね！ 私を美味しくして食べるつもりなんだわ！」

ロリの見事な誤解に、アンナは身をよじって笑いをこらえる。牧師は慌てて両手をふりながら、必死になって弁解する。

「まさかっ、とんでもない！ こっ、この笑顔をご覧なさい、そんな誤解はすぐに消えるはずだ！」

身を乗りだしてそう語る姿に、ロリはたじろいでいる。今にも襲いかかってきそうだと感じているかもしれない。

「ブルーウェル牧師、あのう、少し離れたほうがいいのでは――」

カーン！！ カーン！！ カーン！！

突然に、頭上から重たい音がいくつも落ちてきた。窓の外へ目をやったのはアンナと牧

師の二人だ。ロリは音の聞こえた方向が分からずに、きよろきよろと首を動かしている。

鐘つき塔が鳴っている。この村にいる誰もが耳にしたくない不穏な音が、いつまでも夜の腹内に響いた。

4回目 燃えるヘビ

カーン！！

カーン！！

カーン！！

カーン！！

（どうして！？ どうして止まないの！？）

アンナはひどく戸惑っていた。

鐘の音は《村の近くに獣が出た場合は3回ずつ》、《火事など急に人手が必要な場合は5回ずつ》鳴らすと決まっている。

それなのに8回を過ぎてもひたすら鳴り続けている。

不安にかられたアンナはブルーウェル牧師を見やった。牧師の目は驚愕するように大きく開かれている。そして、窓の向こうにある何か恐ろしいものと対峙していた。

彼がそんな表情をしたことは、これまで一度しかない。アンナが知っている限りでは、何年も前に街道で盗賊が出没した時、子供が殺されたらしいと聞いた牧師は今みたいな様子だった。

アンナには、どうしても人の命を奪うという行為が想像できない。

家畜を殺すことにもためらいを見せる彼女は、年下の子にも臆病だとよく笑われる。そ

それでも、命が精一杯の力であらう感触は恐ろしい。

どれだけ大きな口をしていたら、人の命を飲み込んでしまえるのか。

どれだけ繰り返してきたら、血の臭いに慣れてしまえるのか。

そんなことを考えようとするだけで、頭がズキンと痛むような不快さを感じ、胸の奥に石をぶつけられた気分になる。たとえ自身に刃が向けられた時でも、彼女は武器を構えたりできないだろう。

「ブルーウェル牧師」

小さな頃から父親のように慕い、悲しいことがあれば教会まで駆けてきて、彼に話をした。

「大丈夫です、きっと心配はいりません」

牧師は昔と同じように微笑み、昔と同じようにアンナの頭に大きな手を乗せる。その手はごつごつしているけれど、同時に彼の優しさをじんわりと感じさせる。

こうしてもらうと、アンナは本当にもう大丈夫だと安心できた。それでやっと泣いたり怯えたりせずにすんだ。

「外へ出て確認します、二人はここで待っていないさい」

立ち上がった牧師は奥の寝室へと向かい、一振りの長剣を取って戻ってくる。

濃い緑色をした鞆、銀色の美しい柄、それが暖炉の火に照らされて光の線を引いた。鞆

を飾りたてる美しい意匠を見れば、武器としてだけではなく、もっと高い価値を持つものだと言葉に想像できた。

「いいですね、私が帰るまではここに居てください。子供たちが心配でしょうけど、まずは安全を確かめてからです」

強い視線をまっすぐに向けられて、アンナは黙ったまま小さくうなずく。

大きな背中が扉の外へ消えてしまい、両手で体を抱いて立ちすくむアンナに、小さいけれどしっかりとした声が呼びかける。

「アン……これ飲んでみて、きっと楽になるわ」

振り返ってみると、ロリの笑顔があった。アンナが歩み寄ろうとした時、頭上の音が不意に鳴り止んだ。

静寂が戻っても、それは普段の静けさとは異なるものだった。誰かが怒られていること

を知っていて、遠くの部屋から聞こえない声を耳にするような、落ち着かない空気にすごく近い。

「静かになったわ。ほら、アンの分が残ってる」

「――ええ、ありがとう」

半分くらい上の空で返事をする。それでもコップから温かな液体を口に含んで、鼻の奥に草の匂いが香ってくると、気持ちもだいぶおさまった。

（そうよね、きっとなんでもないはずよ。ひよっとしたらカールミたいな子がムキになって、ひどい悪ふざけをしたのかもしれない）

村の子供が鐘つき塔をイタズラに使うはずがなかった。それでも、また不安が流れ出さないように、自分の心にウソの答えを当てておきたいのだ。

テーブルの向かいでは、ロリが所在なく木目をなぞっていた。彼女はアンナの心配を敏感に察したようだ。落ち着かないのか、口をとがらせて小さく歌をつむいでいる。

孤児院での立場から身についた責任感が、もっとしっかりするようになんとうながす。こんなにも幼い子が気を遣ってくれているのに、今まで自分の気持ちばかりを見ていた。

くねくねと道に迷う彼女の幼気な手を、アンナは片手でそつとく
るんでみた。すると、
卵のように愛らしい顔にパツと笑みが戻る。睫毛に飾られた宝石の
ような瞳は、とても大
切そうにアンナを注視する。

「さっきの音は、三本ある鐘つき塔の一つが鳴ってたんです。あれ
は危険なことを皆に早
く知らせるためのものだから、きちんとした鳴らし方があるんです
けど……」

この村の人間ではないロリは、あの音にどんな意味があるか知ら
ないだろうと思って、
そう説明した。

「それじゃあ、やっぱり怖い音だったのね。あんまり大きいから、
アンのお腹が鳴ったん
なら悪いなって心配してたの」

「まあ、それならロリさんはずいぶんと重たかったんですね。だっ
て私、たくさん荷物を
載せても平気で運べるんですから」

軽口をたたく相手に、アンナも上手くやり返す。そうして目と目
で笑い合った。

牧師が出ていってしばらく経つが、彼は戻ってきそうにない。温
まっていた指先が少し
ずつ冷えてくると、一緒に心のぬくもりまで持っていかれるようだ。

どうしても気にかかり窓の外を見たら、闇が笑い返してきたように錯覚し、たちまち顔がこわばってしまう。

「そうだ、一緒に礼拝堂に行きませんか？ アガスティア様へお祈りをすれば、きっと大丈夫です。心配することなんてありませんよ」

それは、今の自分にできる最も確かなことのように思えた。少なくとも、ただ怯えながらじっとしていたところで、事態は一つも動かないのだ。

「ん……私………ない。だって………神様は人間が大嫌いだから」

ぼそぼそと囁かれる言葉はうまく聞き取れなかったけど、最後に、なんと言ったのかは、ちゃんと耳に届いた。

——神様は人間が大嫌い。

「えっ…と、どうしてそんなふうに思うんですか？」

頑張っ て出したはずの普段どおりの口調は、やっぱり少し硬かったのかもしれない。口

りは気おくれしたようにうつむいてしまって、返事をしない。

「ごめんなさい、私……怒っているわけではありません。びっくりして、それで驚いているだけです」

アンナの手のひらには、細枝で編まれたと感じれるくらい繊細なこぶしが、沈黙を握りしめたまま収まっている。

この子が今まで見せてくれた信頼を裏切りたくはない。アンナはもどかしい気持ちを抑えながら、じっと彼女の言葉を待っていた。

「神様は……誰も愛していないわ。それにね、人間を殺したりもするの……私は一人だけ逃がされたから無事だったけど」

信仰を持たない人もいると、メサイア先生は言っていた。自分の生活だけを信じて、他に救いを求めない強い人たちなのだと。

アンナにはロリがそうだとは思えない。それでも、彼女が女神アガスティアを冒瀆する言葉を口にしたことは悲しかった。

「神様は人を……愛していないんですか。——私には両親がいます、一緒に暮らす子供たちも同じです。無残に殺された人も大勢いるのだから、ロリさんの言うことは当たっているかもしれません」

言葉を口にすれば、胸の奥にツンと痛みを覚える。自分はまだまだ不十分な子供で、本当は誰かに甘えたいのだと叫びたくなってしまう痛み。

小さな子たちの笑顔では、どうしても埋められない穴があるのだ。

「けれど、私や子供たちには信仰があります。それは畑を耕す時に両足を支え、黒く冷たい水が押し寄せても心を支えてくれます」

ブルーウェル牧師から熱心にそれを学んだ。そのおかげで、彼女は夜に泣くことが少なくなつた。全くとは言えないところが情けなかったけれど。

ブルーウェル牧師は、とても信心深い人である。彼はとりわけ『剣と盾の信仰』を重んじていた。

信じることは己を剣とし、助けることは自身を盾とする。

「ロリさんはすごく強いのだと思います。でも、それって辛くはありませんか？」

アンナの問いかけに大きな瞳は逡巡し、それからひどく大人びた顔をして息をついた。

「辛いことなんかたくさんだって横を向いたら、目の前の楽しいことにずっと気づけないわ」

少女の眼差しは確信を持ってこちらを見ている。それは彼女が生きて知った世界の真実なのかもしれない。

そんなふうに、喜びを糧に前へ進めたらすばらしいと思う。

「アンが私にそう教えてくれたのよ。もしかして忘れちゃったの？」

「いえ……あつ、そう……でしたね」

ウソをついてしまったことより、ロリが本当に大好きな『アンナ』の影が、自分とはあまりに違いすぎる事実が胸が痛んだ。

その人は、大事なものが土砂に埋まっていたら、悲しんで膝をつくより前に、手で掘り出そうとするだろう。その前向きな姿勢は、アンナが尊敬するメサイア先生と重なって見える。

「アンナも、お父様も、たくさんたくさん私に教えてくれた。その時はよく分からないってこともあったりしたけど、後でちゃんと同じように思ったわ」

服を着替える前に念入りにとかした金色の髪は、湧水のごとくある彼女の内面を映したみたいに輝きを散らす。

この子は自分よりもずっと広い世界を知っている。アンナは素直にそう納得できたことがうれしかった。

チグリスの村から出ていきたいなんて考えもしなかったけど、この日、初めてアンナは

外にある世界がどんなものであるかを見たいと思った。いろいろな人が喋る高い声や低い

声、いろいろな物の手ざわりや色あい、それからいろんな草の匂い、本のページをめくる

瞬間みたいに、出会いの予感がふくらんでドキドキする。

「えっと、ロリさんはここへ来るのが目的だったんですか？」

「ここ？　じゃない……けど、アンが見つかったからここでもいいわ」

満面に笑みをたたえてそう言われると、なんだか次の質問が喉に引っかかってしまう。

（やっぱり先生に相談しないと……）

彼女を助けるには、きちんとした大人の意見が必要だ。そう結論を出して、アンナは再び外の様子を確認しようとする。

「あっ、見て！　向こうが明るくなったわ」

ロリの言葉が視線を窓に貼りつける。

窓枠が四角に縁取った闇の上隅に、橙色のへびみtainなものが見える。それは僅かに横へ移動していた。家や木の陰に隠れながら、少しずつ体を伸ばしていく。

「なに……あれは？」

口は疑問を作ったけれど、頭の中にはいち早くその答えが浮かんでいる。

火事ならあそこまで次々と燃え移ったりはしない。そこへ目を凝らせば、ずっと遠くの
ほうにぽつぽつと揺らめく点があった。

（あれは人が火を放ってるのよ！）

二つの頭を持ったヘビは、燃えさかる身体で村の外周に巻きつくうとしていた。

この村がいったいなぜ襲われているのか。

理由も分らず相手の悪意だけを見せられたアンナは、スツと血が下がってゆく感覚に
身を硬くする。

そういえば大人たちが話していた。帝国の旗は多くの人の血で染められたから、あんな
にも赤い色をしているのだと。

アンナはその旗を見たことがない。だけど、大人が『帝国』という言葉を出す時に、なぜ顔を歪めていたのか分かった気がする。

「帝国軍が攻めてきたんだ」アンナは震える口から、その言葉を絞り出した。

4回目 燃えるへび(後書き)

5回目　ロリの悲鳴

大陸とはどこまでもある果てしない地面のことで、その上にはいくつも国が存在し、獣を追い払って人間の住む場所を造っている。

安全な土地がそこかしこにできると、人々はしだいに欲を出し、本来は取り合うべきではない場所をめぐる争いを起こすようになる。戦争はそうして始まったのだとメサイア先生に教わった。

「燃えてる……アン……燃えてるわ！」

隣にやって来たロリが腕にしがみつく。

炎はすでに壁となり、不気味に体を揺らしながら遠くにそびえている。闇に付いた鮮やかな色は、そばにある民家や厩舎を、ひとつずつ同じ色へと染め上げていった。

「こんな……どうして？」

ロリに引っ張られても、アンナの視線は窓から動かないままだ。

誰も答えてくれない一つの疑問は、恐怖の波をかぶったせいで、いつしか押し流されてしまった。代わりに運ばれてきた光景だけが頭の中に残る。

孤児院が燃えていた。吼えかかるように暴れる炎の下から、子供たちの泣く声が聞こえてくる。

眼前に見えた恐ろしい映像から遠ざかろうと、われ知らず後ろへ下がっていた。腰が木のテーブルにぶつかり、倒れたコップは転がって床に落ちる。

「アンナったら！」

叫ぶように強く名前を呼ばれて、ふと気持ちが引き戻される。表情のないアンナとは対照的に、ロリは怒って眉を吊っている。

「火事になったくらいで驚き過ぎよ！ そんなふうだとこの大きなお尻にも火がついちゃうわ」

ロリに叱られて、アンナは思わず目を瞬いた。彼女の言うとおりだ。ぼんやりしている場合ではない。だけど、ブルーウェル牧師との約束がある。

「どうしたらいいのか……だって、あれは帝国軍が攻めてきたんです。私、家に帰らないと……きつと小さな子は怯えてるはずだから」

「だったら行こう、ほらっ、早く！」

待ってられないと急かすようにロリが手を引いてくる。全身がずっと前に傾き、気持ち

がバラバラの状態だったアンナは、踏みとどまることを思いつけなかった。

「きゃあぁッ！」

前に立つロリの背中へかぶさってしまい、二人とも床に転ぶハメになった。

「——いったた……あの、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

下敷きになったロリから体をどけた途端、むぎゅっと両方の胸を小さな手で掴まれてしまふ。

「ふえっ!?! ……あの……これは……?」

大きな乳房をぐっと持ち上げたロリは、じろりとアンナを睨んでくる。

「アンナはもっとしっかりできるでしょ! 変だわ、今のあなたっ!」

そう言って怒りつつも、どこか傷ついた目をしている。彼女の中の『アンナ』とここに
いる頼りないアンナが、ぴったり合わないと気づいてしまったのだろうか。

「……さすがに重たいわ。アンナだから、まったくもって当然だけど」

気にしている部分をグサリと評価される。どうやら別人の『アナ』も、自分と同じ特徴をしているらしい。アナは顔を真っ赤にしてうなだれるしかなかった。

「ここに居るように言われたのは、火が見えなかった時でしょ。それなのに、いつまでもじっとしてるなんて頭の悪い子供じゃないっ」

腹を立てたロリは、厳しい意見を遠慮なしに挙げる。胸を解放されても、アナは床に座ったまま、しなびた野菜のように縮こまっている。

「でも……ブルーエル牧師が帰ってきたら心配するだろうし……」

「そんなの、させとけばいいわ。ねえ、アナは道でぶつかるまで、私に気づいてなかったんでしょ？」

「はい、あの、不注意でした」

周りにいる子供たちの世話役として頑張ってきたおかげで、『眠り姫』という不名誉なあだ名は返上できた。それでも、以前のアナは失敗ばかりするばおとした子だった。

「いいのよ、あれはべつに。……前から来た人とぶつかるのも、後ろから来た人とぶつかるのも、どっちでも同じなんだって分かる？」

ロリの瞳は微笑んでいた。それはメサイア先生やブルーウェル牧師の表情と似ている。大切な人へ向けられる特別な顔。きっと彼女にとってアンナがそうなのだ。

何かをして失敗すれば怒られる。勝手にどこかへ行ってしまう、心配させてもやっぱり怒られるだろう。でも、それはどちらの場合も相手を想っているから。

ぶつかったら謝ればいい。相手をきちんと気遣えば、もちろんそうするだろう。ぶつからない時は問題がない。だけど、人と人を感じる機会もなくなる。

「そうですね、私やっぱり孤児院へ行きます。ロリさんは待っててください」

はっきりした口調でそう告げると、アンナはサッと立ち上がる。

「こらっ！」

不意打ちでスカートの裾をおもいきりめくられた。

「ひゃあ！？ なっ、なんですかっ」

短い時間でこんなに顔色を変えたのは初めてだろう。少し涙目になったアンナは、腰を

引いて身構える。

「アンナが行くなら私も一緒に決まってるでしょ！ 友達を置いて

いこうだなんて、まったく！」

ぷりぷりとまなじりを上げる少女に、およそ敵いそうもなかったアンナは、せめて心配事を口に出してみる。

「でも、孤児院まですごく距離がありますから……」

「先に悩んだって一つも得しないわ。困った時に悩めばいいの」

この幼い見た目をした少女は、最初に思っていたよりずっと達者であるらしい。

しかたなく2人分の外套を取ってきて、ロリにも手早く着せる。小さな足に丁度よい短靴も借りてある。

外へ出れば、祭りの前日みたいに地面が僅かに揺れている。空気には人の声が混ざり、もうそこまで近づいているようでありながら、どうにもうまく聞き取れない。周囲を見渡してみただ、どこから聞こえてくるのか判然としないのだ。

とにかくアンナが気にかかるのは、孤児院にいる皆の様子だった。

そこへ行くには、北の畑を抜けるのが一番の近道になる。集落から離れているが、それはメサイア先生が後にここへ建てたものだからだと聞いた。

二人は北に向かって夜道を急ぐ。ランタンがなくても足下が確認できるほど、村全体が明るかった。ひっそりと立ち並ぶ木々の間から、炎の壁がときおり覗いては、そのつど足がすくんで止まってしまいそうになる。

頭上の闇まで食いちぎろうとしてか荒々しく盛り立ち、あるいは己の残虐を見せつけようと噛み砕く音を聞かせる。

「ロリさん！　がんばってください！」

彼女の足はどんどん遅くなっていた。もう歩くのさえ辛そうで、いつそ休ませてやりたかったが、ここではそうもいかない。

アンナが振り返っても、先程まであった強がりが出てこなかった。握った手を必死に動かしているのだけど、悲しいくらい前に進んでいない。

アンナは立ち止まり、息を整えながら膝をついた。やっと駆けてきたロリの顔は蒼白になっており、水をかぶったように濡れている。

「あと少しですから、背中に乗ってください」

アンナの言葉を聞いて泣きそうな表情を作ったが、力を使い果たしたのかフワリと倒れ込む。細い身体を抱き上げるのも、それほど苦労はない。

「両手で首に掴まって……………さあ、行きましょう」

グッと両脚で支えながら、一步ずつ前に進んでいく。

懸命に駆けていた時よりも気持ちが焦ってしまい、不安ばかりが募る。アンナは胸の中で、ひたすら女神アガスティアへ祈りを捧げた。

チグリスの土地は、これまでどこの領地にもなっていない。森が開拓されておらず、獣も多く棲息しているため、わざわざ治めたところで得られるものが少ないのだ。

ところが、南にあるアガデス王国が他国と同盟を結んでから、状況は一変する。成人した男は徴兵され、拒むことができなかった。一家族につき1人までとする自国本位の恩情をにかけてみせると、強引なやり方で従わせたのだ。

帝国と戦争をするために、どこの国でもたくさんの兵士を集めていた。

だけど、そうまでしても帝国の侵攻はいささかも衰えず、訃報の合間に届けられる手紙には、日ごとに苦しくなる戦場の様子が綴られていた。

この村へ帝国軍がやって来たのだから、外側に位置するアガデス王国は、すでに敗れてしまったのだろう。

背中に当たる少女の重さが、アンナにある恐ろしい噂を思い出させた。

——帝国軍は侵略した村から子供をさらう。

誰も本気にはしていなかった。だけど、帝国軍はそれくらい無慈悲であり、人の心を持たないのだと例える上で、よく使われていた話なのだ。

もしかしたら、それは本当のことかもしれない。アンナの心はそんな不安のつるにもつれて、抜け出すことができなかった。

恐ろしい夢の中でしか足を踏み入れない場所がある。それがこうして目の前に現れたのなら、他にどんなことがあっても不思議ではないように思えてしまう。

（大丈夫……大丈夫よ、着いたらきつと皆に笑われちゃう。私がどんなに慌てていたか、おもしろく言いふらすに決まってるから）

締めつけるような胸の苦しさが増していくほど、頭には楽しい思い出が透明な絵になって次々とよぎる。一人一人の笑顔が浮かぶ。食事の時間に皆がそろって口元を汚しながら食べていた顔、古着を縫い直すと抱きついて喜んでくれた顔、ブルーエル牧師が獣に扮してだれもかれも大はしゃぎした時の顔、毎日それを見てきたアンナだけど、昨日の顔を

探してみたことは一度もなかった。

山積みの『今日』を受け取ったら、それをかたづけるので手一杯だったから。

（早く……戻って……みんなの顔を……！！）

急に地面の揺れが激しくなったと感じた瞬間、右手の林から黒い塊が躍り出る。それは行く手を阻むように、アンナの目前へ突っ込んできた。

「うぁっ!？」

とっさに体をそむけようとしたら、ロリの重さに引きずられて、そのまま倒れ込んでしまう。顔が地面とぶつかり、痛みに視界を奪われる。

馬の蹄がドカッドカッと大地を蹴っていた。

跳ねた泥が頭にかかり、混乱する思考に冷たい恐怖を浴びせられる。

「そこから動くな！」

くぐもった男の声が、こちらに命令する。アンナは視線を動かすことさえ許されない気がして、じっとその場で息を詰めていた。

ドカッドカッと地面を蹴る音が、後ろからも近づいてくる。

馬の荒い息遣いと金属の触れあう高い音。ただ音だけが、彼女に周りの様子を伝えてくれた。

両手に土の感触はなく、あるはずの地面を正しく捉えることができない。あぜ道で腹這いになっているはずだけど、なんだか水に沈んだようで感覚が曖昧だった。

「いい子だ……暴れるなよ」

乱れたスカートから伸びる両脚に風が当たる。寒いとは感じない。それでも、体の震えが止まらないのはどうしてだろう。

ガチャリと音を立てながら、鎧に乗っていた銀色の脚が地面を踏みしめる。鎧をつけた下肢は鈍く輝いており、それが人のモノだとは思えなかった。まるで童話に出てくる死霊と同じで、血を持たずに歩いてくる。

不意に彼女の鼻先へ槍の刃が落ちてきた。

「んんっ!？」

肺がギュッと縮んで、固く閉じていた口から空気が漏れる。恐怖のあまり耳の奥がジンと痺れたようになる。

「どうだ、そいつは？」

「ああ、うん、これくらいじゃないか」

「よし、なら連れて行くんだな？」

アンナの頭上で二つの声がする。そこに出てきた言葉を、彼女の理性は反射的に拾い上げた。

（えっ？　だってあれは……ただの作り話じゃ……）

感覚をなくしていた身体に、ロリのしがみつく両手を見つけた。彼女の重さをはっきりと肌を感じる。

「アンナ！」

その悲鳴は、意思よりも確かな力でアンナを動かした。

「だめえっ！！」

眼前の槍も気にせず、左手について体を跳ね起こす。振り返ると右手でロリの服を必死に掴んだ。

少女を引き戻すより先に、アンナの横腹へ尖った足先がめり込んでいた。

「ぎっはう！」

衝撃の後に、息が止まって身をよじる。涙がこぼれて唇をかすめた。

「ごほっ、ごほっ、ううう……」

思考がぐるぐると回り、いくつもの感情がごちゃ混ぜになっている。そんな状態にもかかわらず、もっと奥から鮮明な気持ちが強く湧いてくるのだ。それはアンナの心を奮わすばかりでなく、体に張りついた痺れを拭い去った。

「やめて……その子……返してっ」

離れている兵士が、ロリの体を抱え上げていた。外套から突き出た小さな足が、宙を蹴るみたいに必死でもがく。

アンナは駆け寄って取り戻そうとした。気持ちがはっきりとそれを命じて、他に何も聞こえなくなった。

「このガキっ！」

長い槍が空を切ってアンナにぶつかる。

悲鳴も出さずに、彼女の体は傾斜を転がっていく。下の畑に落ちるまで、自分がどうしてそうなったのかも分からない。

休耕地が闇の奥まで広がり、来年は種をまくはずの地面に、炎の

へびがちらちらと横たわっていた。やわらかな土に受け止められたアンナは、力の入らない腕でなんとか起き上がろうとする。

「あっ……くっ……」

大切なものがすぐそこにある。だけど手を伸ばしても、それは遠くでありすぎて掴むことができない。

アンナの意識は、果てしない暗黒の向こうへ引き伸ばされてしまった。

6回目 地下牢の中で

彼女は獣に抱えられて、どこまでも闇に覆われた世界を、延々と走り続けていた。

獣の腕は硬く冷たく、その息遣いは荒々しい。言葉を話せない彼女は、ひたすら泣いて周りに助けを求めたが、ようやくそれが叶わないと分かり口をつぐんだ。

できることが何もなかった彼女は、ただ真っ暗な世界を怖がりながら、自分を食べるのだろう獣の存在に震えていた。

やがて、闇の中を疾走する獣に、別の獣が追いついてくる。

ドカッドカッと重たく地面を蹴る音がいくつも近づき、彼女を抱えた獣は低く唸りながら首を動かす。

獣同士の争いは、およそ彼女に理解できるものではなかった。

吼えかかり、身体を跳ねさせ、暗闇の世界で縦横無尽に動きまわる。爪と爪がぶつかり合う鋭い音が虚空に弾け、何度も繰り返していくうちに、やがて周りの獣は一匹、二匹と姿を消した。

体温のない獣の体にすがりついた彼女は、歯を食いしばって、戦

いが終わるまでひたすら耐えていた。

最後の一匹になった獣は、よろよろと歩いては倒れ、それでも彼女の体をけっして離そうとしない。

湿ったぬくもりに顔を撫でられていると、彼女の中にあつた恐怖は少しずつ形を崩していき、向こう側で待っているあの人のもとへ辿り着くことができた。

「ああ…愛しいエリシャ……どうか無事に育ってちょうだい……
…いつまでも、いつまでも、あなたのことを憶えているわ」

大事な人がちゃんとそばにいてくれたので、彼女は心から安心して深く呼吸をしてから寝返りをうった。

アンナはもう朝になったのだと分かり、手放しがたいまどろみの中で、子供たちへなん

と言って叱ろうかと頭を働かせてみる。

さきほどから、誰かが指をくすぐっている。どうやらまた新しいイタズラでも考えついたのだろう。本当にしようがない子たちだと思いながら、アンナは朝一番に怒ったフリをするために目を開ける。

「……んっ……?」

自分はちゃんと瞼を上げたのだろうか。そんなささやかな疑問が、ぼんやりした頭に浮かんでくる。

「やだ……どうして……いやっ」

そこには板戸の縁から淡くこぼれている朝の光もなく、2段作りのベッドが隣り合ってならぶいつもの光景もなく、のっぺりとした闇が一面に口を開けて待ち構えていた。

アンナは巨大な獣に睨みつけられたようなショックを受ける。

(怖い……怖い……怖い……いやだああ!)

大切なものを放り出して泣きわめく子供みたいに、良識も判断も捨てて、その場でおもいきり叫んでしまいたくなる。

「よお、やっと目が覚めたみたいだな」

パニックを起こしかけた彼女に、どこか軽い調子の声が届く。

その一言が、アンナの消えかかった理性の火を灯してくれる。闇のどこかに彼女以外にも人がいるのだ。それだけで、心の底からホッとする。

「あの……誰かそこに……ひゃう！ わっ、ちょっ！？」

指先に感じていたくすぐったさが、不意に袖口から腕を這い上ってくる。肌を引っかく。小さな痛みが、アンナにその正体を想像させる。

「やつ、これっ……うそ！ あっ、あっ、そんなっ」

慌てて服の袖をはたいても、虫は手首から肘へと進んでくる。大きさは人差し指と同じくらいで、恐怖を感じるには十分だった。

「おいおい、そう慌てるなって。そいつはただの地虫だ」

その一言で、アンナの体は凍りついてしまう。黒くてアーモンドの形をしたおぞましい姿が、彼女の頭の中をカサカサと這いまわる。すべての虫が嫌いというわけではないのだけれど、この虫だけは心の底から嫌悪していた。

ソレがまさに今、脇から胸へと入り込んでくる。

「いやあああああ！！！！ だっ、あっ、やあああああう！！！！」

アンナは誰かに見られていることも忘れて、硬い床の上で悶えながら地虫を追い出そうとする。けれども、地虫は縦横に揺れる丘の間を巧みに駆けずりまわり、よりいっそう彼女を半狂乱にさせた。

「動くなっ！」

男の声に一喝されたアンナは、ビクリと身体を硬直させる。忘れていた恐怖の断片を思い出しでもしたように。

闇の奥で、人の気配みたいなのがふと途切れた。

アンナが瞬きをした瞬間に、その人物は彼女の前に現れていた。

そして、意識が判断を

下すより先に、もと居た闇へと帰っていく。

「――えっ？」

ずいぶんと間を置いてから、アンナは驚きを示す。いったい何が起こったのか分からな
いたために、思考が追いついてこなかった。

「地虫だよ。取ってやったぜ」

声は楽しそうにカラカラと喋る。

アンナは言われたことだけをなんとか理解して、服の上から身体

を触ってみた。確かに虫はいないようだ。

だけど、彼女は服を身につけたままにいる。それなのに服の中に入った虫を、どうやって取り出したというのだろうか。

（ひょっとしたら……悪霊が……）

他の誰かがいるという希望が崩れ去り、暗闇に潜む住人の存在が絶望へと変わる。

「しょっぱい身なりのわりには、中身すげーんだな。びっくりしたぜ」

「……はい？」

「目利きにはそれなりの自信があっただが……ここまでデカイとはな」

そこまで言われて、ようやく内容が呑み込めた。そして、すぐさま顔が熱くなった。

「なっ！ あっ、あなたっ」

他人に指摘されるまでもなく、彼女は自身の胸の大きさを恥ずかしく思っていた。それなのに、顔も分からぬ相手に無造作に触られるなんて。

たちまち汗が噴き出してきて、アンナはどこかにいる相手を睨も

うとする。少しずつ闇に慣れ始めた視界には、ぼんやりとした人影があった。

「しっ、しれっ…失礼です！ 他人の体をそんなふうに…勝手に」

子供たちを湯に入れる時だって隠しているのに、まさかこんなところで男性に触れられるとは想像もしなかった。あまりに動揺してしまい、唇が引きつっていた。

「だったら、あのまま大騒ぎさせときゃ良かったのか？ 何もできなかったくせに」

「それは…：そっ、その前に言ってもらえれば…：心の準備が…：あの…：…私——」

小さくなっていく声は、最後に枯れた花みたいにしぼんで消えてしまう。アンナには自分の怒りが間違いだと気づくだけの良識が、すでに戻っていた。

「ごめんなさい。あなたは…：私を助けてくれたんですね。えっと…：本当にごめんなさい！」

「……………」

謝って許してもらえなくても、彼女にはそれしかできない。沈黙は怖かったけど、頭を下げたままじっと耐える。

「いいぜ、べつに気にしなくても。まあ、こっちもイイものが手に入ったからな」

「そ…そうですか」

思わず胸を押さえて身を引いた。人影はそれを笑ったのか、右手をひょいと上げてみせる。

「地虫だよ、こいつはエサになるからな」

意味ありげにそう言った男は、腰の袋にそれをしまい込んだ。石壁に背中をあずける恰好で、こちらに顔を向けている。

男の背後にある壁は、大ざっぱに円を描きながら、空間をぐるりと囲んでいた。広さはおおよそ2部屋を合わせたくらいだろうか。床は硬い土の地面で、ところどころに草が生えているのが分かった。

「あのう…ここはどこなんでしょうか？」

現状が何も把握できないことに、ようやく不安を感じたアンナは、遠慮がちに相手へ尋ねてみる。

「ここか？ そんなこと訊かれてもな。見たままでしかない、城の地下牢だ」

アンナはこれまで城の地下牢に入った経験などない。だから、男の言葉を耳にしても、

それほど実感が湧いてこなかった。けれども、男が口に出した単語から別のイメージが繋がり、記憶の中からいくつもの映像が浮かび上がってくる。

城。兵士。馬。鎧の足。槍の刃。燃えている土。ロリの悲鳴――

「ロリ！　そうよ、あの子はいいたい……………さっきまで背中を掴んでたのに」

すべての言葉が口からこぼれ出るより先に、後悔が彼女の唇を縫いとめる。

守ってやれなかったという事実。何もできなかったという現実。

それらが彼女自身の責

任を明確に追及する。背負っていた重さを容赦なく突きつけてくる。

あれほど小さい身体でも、やはり重たかった。抱えて走ることもできなかった。うなじ

にかかった息はとても熱かった。自分は命を背負っていたのだから当然だ。

偶然に出会い、話をして、すぐに好きになった。彼女が探している『アンナ』を、一緒

に見つけてあげたいと思った。

「どうして……………どうして……………嘘よ……………こんなの嘘よお」

泣いても遅すぎる。だけど、心が痛くてたまらなかった。どうしようもなく声を上げたかった。

身体を折り、許しを請うかのように頭を下げる。どんなに強く両腕を握っても、痛みは小さすぎて歯止めにならない。

涙が膝の上に落ちてくる。こめかみの辺りがズキズキと圧迫されるようだ。

「おい、そうやってると上手い考えでも思いつくのか？ そんなら助かるけどな」

滲んでしまっただけに見える相手から、そんなセリフを投げられる。

アンナはうつぶせていた上体を起こすと、男のほうへ視線をやった。頭の後ろに腕を組み、こちらを見返しているのがぼんやりと分かる。

「お前、ここで死にたいのか？」

男の声は抑揚がなくて、真剣にそれを尋ねているのか判断できない。それでも、自分に呆れていることだけは伝わってくる。

「私を……責めているんですか？」

「質問はこっちが先だ、けどまあ答えてやるよ。俺はお前がしたことなんて少しも興味が

ない。けどな、死にたがる奴ってのは他人を巻き込むからな。早めに見切りをつけたいてのが意見さ」

血が、アンナの体を巡っていく。

ロリの語った言葉が、頭の奥でパチンとはじける。

『辛いことなんかたくさんだって横を向いたら、目の前の楽しいことにずっと気づけないわ』

できることしかやろうとせず、それが無くなれば手を動かそうともしない自分。こんなのはひどい怠け者だ。もしロリが見ていたら、きっと眉をしかめるだろう。

アンナは汚れた袖で涙を拭いた。それでも、こぼれるものが首すじをつたってしまいうけれど、下を向いたりはいしない。

「私は……家に帰りたいです。こんな真っ暗なところで……死にたいと思いません」

「だったら逃げるしかねえ、俺もそろそろ腹が減ってるしな」

男の声はずいぶん齒切れが良くて、すでにここから出られることを確認しているみたいだった。

「出られるんですか？　どうやって？」

アンナは暗闇に慣れた目で、もう一度自分がいる場所を正確に見渡してみる。

ここは地面を深くまで掘って造られた地下牢だ。壁には石を積んで空間を支えているのだが、その石壁も長年かかる重さにより歪な形になっており、じっとしていると知らない顔が浮かんできそうで怖かった。

天井には網のように組まれた横木がうっすらと見える。そして、その片隅には希望を閉ざすような無情の扉があった。あそこから縄などで縛って下ろされたのか、あるいは外にハシゴがあるのかもしれない。

「連中が下りてくる時はハシゴを使う。まあ、武器もちゃんと持ってるけどな」

アンナの視線をたどった男がそう説明する。それなら、出口はあそこだけしかないのだろう。

まるでビンの中に閉じ込められた虫みたいだ。いったいどうすればここから抜け出せるのか、アンナには考えもつかない。

「えっと……ここから出られるんですよね？」

不安になって尋ねてみる。きっと彼はすばらしい着想を持っているに違いなかった。

「まあな、釣りでもしながら待ってればいいさ」

そう言っ、曖昧にはぐらかされてしまう。名前さえ知らない関係なのだから、しかたないのだけど少しがっかりする。それでも、アンナは男の言葉にも一つの疑問を浮かべていた。

「ここで釣りをするんですか？」

「ああ、糸はもう垂らしておいた。後はエサの具合だな」

男はさも当然のように返事をする。アンナはますますこんがらがって、つい間の抜けた質問をしてしまう。

「何を釣るんです？」

「そりゃあ美味しい魚でもかかればいいけどな。あいにくこの場所で獲れるのは、味気ない獲物だけさ」

男は唇の片方を引いて斜めに笑う。

「バカな帝国兵がかかるのを待ってんだよ」

彼は楽しそうに言っ、のける。確信を響かせたその声は、アンナ

に当たってからも、暗
がりを灯すようにそこへ残っている。

アンナには彼の考えが読み取れない。だけど、言葉はとても力強く彼女の胸を通っていき、小さな希望に届いてはつきりと振動させた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7919v/>

世界少女

2011年11月11日02時09分発行